

001 下広谷は1648年に誕生

生物の進化同様に、地名も生まれては消え、また新たに生まれ、幾多の変遷を経て後世へ受け継がれていく。では現在、我々が住む下広谷という地名はいつ誕生したのか。その答えは、江戸時代の文化文政期（1804年～1829年）に編纂された「新編武蔵風土記稿」にあった。

同書の下広谷村の項目には「下広谷村は郡（注：高麗郡）の東北隅にあり、勝呂郷に属す、この村、おお昔は上広谷と一村（注：広谷村）なりしが、慶安元年（注：1648年）分村せしと言う事は上広谷村の条に弁ぜり・・・」という記述がある。ここから、下広谷は、現在鶴ヶ島市に属する上広谷と一つの村であり、1648年に分かれたことが伺える。

このほか同書には、現在につながるいくつかの情報が記載されている。例えば、村の広さは「東西十町（注：一町約109m）、南北十四町程なれど・・・」とあり、広さはほぼ昔と変わっていないことが分かる。また「村の東に一条の往還あり、古の鎌倉街道と言う秩父辺りより川越及び江戸へ通ふ路なり、幅は二間余（注：一間は約1.8m）、わたり九町・・・」とある。現在の小堤と下広谷の境を走る道路であり、幅もほぼ変わっていないようだ。さらに「構の内に白山社あり・・・」とあることから、当時すでに白山神社があったことも言えそうだ。「慶安元年松平伊豆守領主たる時検知あり・・・」とあることから、時代劇にも登場する知恵伊豆と言われた松平伊豆守信綱（注：川越藩主）が領主だったことも分かる。

200年ほど前に編纂された風土記に、単なる一村である下広谷村が記載されていることに驚きを感じると同時に、後世に記録を残しておくことの重要性を改めて認識させられる。

ちなみに、下広谷村が名細村となったのは明治22年の九か村合併（鯨井村、上戸村、吉田村、天沼新田、小堤村、下小坂村、平塚村、平塚新田、下広谷村）の時である。前回の記事をきっかけに名細村の命名者が判明した。当時、鯨井村村役場の書記を務め、歌人・神主でもあった小嶋平氏とのことである。（本文中の注は筆者挿入）